

西南学院大学

図書館報

第22号

昭和38年4月10日発行

発行所 福岡市西新町798 電⑥0031

西南学院大学図書館

発行人 山下和夫

創造的思考の場としての
大学図書館

図書館長 木村 毅

600名の新入生諸君を迎えるに当たり、本学の図書館を紹介し、あわせて、大学における勉学について、若干の私見を述べたいと思う。本学の図書館は本館および神学科分館・児童教育科分館からなっており、本館はその蔵書のおよそ3分の2をオープン（開架式）にしているが、分館はオール・オープンである。といっても、小学校以来戦後の新教育を受けて来た諸君は、何も珍しくは思わないだろう。戦前の日本では、図書館といえば大学図書館か公共図書館に限られていた。旧制中学や小学校では、余程心がけのよい学校以外は、図書室らしいものさえもっていなかった。戦後、自発的な学習を重んずる民主的な教育が導入されるに従って、高校以下でも図書館が新しい教育の場として、中心的な位置を占めるに至った。

昭和25年の図書館法のほかに、28年には学校図書館法も制定され、高校以下にも図書館の設置が義務づけられ、司書教諭の制度もその基礎が築かれた。学校図書館協議会が各地方に設けられ、コンクールも実施されて、学校図書館の発展に大きく貢献してきた。その施設や運営の仕方、図書館の先輩国アメリカの方式をとり入れて、オープン・システムが普通になっている。視聴覚関係も随分整っている例が多い。そういう環境のなかで教育されてきた諸君は、まことに幸せだったというほかはない。だが、不幸にして高校3年間は味気ない受験勉強ばかりではなかったらうか。今からである、本当の勉強をするのは！そのために、開架式の図書館がどれ程役立つことであろう。ここで私が諸君に望みたいことは、われわれの図書館を、〝自由で創造的な思考〞を訓練する場所にして貰いたいということである。単に既存の学説の摂取と型にはまった思考だけでは十分ではない。「優等生すぎる産業技術者」と題して、立命館大学星野芳郎教授は、大要次のようにいっておられる（朝日38.1.6）。驚異的な成長を遂げつつある日本の産業界で、近ごろ技術者の質的貧困がうんぬんされた。外からではない、彼ら自身が自己の構想力の貧しさを痛感しつつあるのである。以前は成果の上がらぬのを、研究費の不足と設備の貧困のせいにてきた。しかし、最近

のように物質的条件がそろってくると、能力の低さは弁解しようもない。それでは彼らは、頭脳が悪いのかというと、むしろ逆に優等生すぎるのである。権威的に与えられた前提をテクニカルに理解する力では、世界でも抜群である。だが、それだけのだ。優等生の引退の時期は近づきつつある。大前提をも素直に受け入れることのできない「落第組」のうちこそ、将来の日本を背負って立つ真実のタレントが潜んでいるのではないか。……

日本の大企業の多くが満身これ借りものの技術で武装していることを歎く者は、星野教授の「落第生立国論」に多くの共鳴を感じずにはいられないはずである。ことは技術の問題だけではない。文学や社会科学の研究でも、もはや小手先の器用さだけで済まされた時代は過ぎ去ろうとしていることを、大学の門をはいるに当って、とくと銘記しておいて貰いたい。

そういう遠大な使命を荷なうとするなら、大学図書館のオープン・システムはどこまでも盛り立てていかなければならない。そのためには図書館道徳の向上が何よりも大切であることは、いうまでもない。9年前本館建築に際してわれわれが最も危惧したのも、また、数年来われわれの最も努力してきたのも、その点であった。幸いにして本館における事故の比率は比較的小さい。最近の統計では、年間の net loss はオープン図書0.2%前後である。大学生としての自覚によることもさることながら、小学校以来12年間にわたる訓練のたまものではないかと思う。その意味でわれわれは高校以下の図書館教育に敬意と感謝の念を禁じえない。と同時に、諸君はまた出身校の名譽を荷っていることを忘れてはならない。もちろん、これで十分ではない。事故は絶滅されるべきである。数十年にわたる蓄積から、一冊失なわれることに、本学の学的水準はそれだけ低下するのである。深く思いを致すべきであろう。

基督教

(一) 本学の基督教の姿を具体的に知るには、世界史を形造ってきた信仰の人物の姿と思想によるのが最もよい。しかも自分に最も触れてくる人物を見出すためにも手引きとしてヨルダン社「信仰偉人群像」(古代中世篇)(近代篇)はいい。

岩波の会波八一「リンカーン伝」、新教出版の「内村鑑三」「新島襄」「カルヴィン」「ニーバー」「ブルナー」「パスカル」等は現代思想書といえる凡庸な伝記ではない。NCCからの「ウエスレー」「ジョージ・フォックス」「フランシス」やペイントン「吾ここに立つ」(ルター伝)は動乱の世界史を形成する信仰の息吹が浮彫されている。

(二) 同じような意味でキリスト教信仰の中での『真理の力への畏敬』により現代の嵐を生きぬいた前東大総長矢内原忠雄の「大学について」「政治と人間」「日本のゆくえ」南原繁の「現代の政治と思想」など諸君の登山口に立つ尊い道標でしょう。

同様な意味で真理と信仰を実践の中に求めるシュバイツァー博士の「わが生活と思想」なども、「現代人の不安と苦悩」「宗教と文学」等で現代の課題を悩む佐古純一郎氏の諸著と共に大きな共感に誘うでしょう。

(三) 生きた体験で聖書自身を解説したものに賀川豊彦「聖書の話」黒崎幸吉「聖書の読み方」があり、ブルナー「基督教と現代世界」「聖書の真理の性格」と共に勧められる。

少し難しいがキュルケゴール「イエスの招き」やワイゼッカー「信仰と自然科学の対話」、リチャードソン「福音書の奇蹟」等キリスト教への誤解を正す深い述作です。

(文学部 山路基助教授)



哲学

旅行をするにも山に登るにも案内や地図というものがある、それを手引きにしながら、自分の目的や好みにも合い、なお能力や経費の都合も許す限度内で、コースの選定やそのための準備や計画を進めることになる。開雲にいきなり目的地を決めて何の準備もなしに即座に出かけられるものではない。哲学を学ぶにしても同じことである。いきなり哲学の専門書に取っ組んでみたところで恐らく何の得るところもないばかりか、頭が少々おかしくなる位が落ちであろう。

哲学という学問にも、もとよりその案内書(Introduction to Philosophy) というものがある。普通に哲学概論とか哲学入門とか言われているものである。世界的に名のある人たちによって書かれた立派なものも、またそれらの訳訳書もいろいろとある。だからそれらのものを読んで

一応哲学というものについての大体の見当がつけられるとはいえるであろう。

しかし実際問題としては、その場合でも、一応哲学の歴史を学んで、その基礎知識の上に立ったものでなければ、問題そのものや問題相互の関連性の重要な意味を適確に理解することが極めて困難であるといえるであろう。概論といえども要するに古今の哲学思想の歴史なくしては無である。だから先ず最初どうしてもなさなければならぬのは、それぞれの哲学者たちの思想とそれらの歴史的展開の跡を曲りなりに一通り学ぶということではなければならない。概論はその後の総まとめとして始めてその概論書と

しての効果を充分に収めることができるといえるのではあるまいか。人によって考え方の相異もあるだろうが、私は大体以上のような考えに基づいて、先ず何よりも哲学の歴史を学ぶことが先決だと思う。この意味において本学の「哲学」においては、「西洋哲学史」が講ぜられている。しかしなぜ

新入学生はどんな本を読むべきか？

各教授に聞く

に「西洋」と名のつく哲学史なのであるか。東洋には哲学の歴史というものはないのであるか。この問いについては今ここでは字数の都合で触れる余白がない。これについては講義の際にゆずる外はない。そこで問題になるのは、どのような本を読んだらよいかということになるのであるが、日本の学者の書いたもの、西洋の翻訳もの等一々数えあげることができないほど沢山にあって、しかも各々一長一短を免かれないのであるから、諸君は自己の能力とポケット・マネーとに相談しながら、または本学の図書館で適当にえらばれたらよいであろう。その中で、ここでは次の二つだけを参考までに掲げておこう。

1. 角川文庫「西洋哲学史要」 波多野精一著 (100円)
2. 岩波文庫「西洋哲学史 上・下」シュヴェーグラー著 谷川・松村 共訳 (各150円) (文学部 三串一士教授)



物理・数学

社会の進歩は、いろいろな点で評価されますが、生産力の進歩ということは、その大きな指標といえます。生産力の最も重要な要素は技術ですから、産業史や経済史と関係の深い技術の歴史こそ、いろいろの歴史のうち、基本的な位置を占めるといってもよいでしょう。各時代の社会状況や技術の発展と関連した科学の発展の歴史を知ることにより、人間そのものの歴史の探究も深まっていくと思います。「すべての学問は、ギリシャにその源を発する。」といわれています。以来数千年、人類の科学思想の歴史をふり返ることにより、自然科学や技術の比重がますます加わってくる現代社会において、自然科学をどう考え、どう対処するかという問題を考えてほしいと思います。本学図書館3階の開架書架には、諸君の希望にそえる科

学史関係の図書が沢山あります。一寸あげて見ると、

中教出版 科学史大系 11巻

岡 邦雄 自然科学史 7巻

ダンネマン 大自然科学史 11巻

バナール 歴史における科学 4巻

朝永振一郎 物理の歴史 (毎日ライブラリー)

近藤洋逸 数学の歴史 ()

白井俊明 化学の歴史 ()

等々です。岩波新書・セ・ジュ文庫にもすぐれた本があります。これら数十冊の書籍から、自己の自然科学観を形成されますようにおすすめる次第です。

(文学部 台信達二教授)

地 学

地学は一般教養として課せられている。そもそも教養課目は、専門コースにとって直接の関係が薄いかも知れないが、自分が祖先から受けついでいる文科的科学的遺産に眼を開かせ、自分自身の人間性を発展させ、正しいものの考え方を会得させ、そして社会人となって直面する困難な問題を如何に解決するか準備をさせるところに意義があると思う。地学は、人間が自分達の住んでいる地球に対して幼い頃から抱いていたかずかずの謎を解き明かし、天然資源の開発に道筋を示してくれるばかりでなく、過去の地球に起った事件が、偶発的なものではなく、歴史的な法則性をもって必然的に現われたものであり、地球が将来も変化発展していくことを教える。かくして、地学はその歴史において、人類の哲学および科学思想に強く影響を及ぼしてきた。

この地球の歴史の学問である地学の勉強から、祖先が真実を求めて如何に苦斗してきたか、自然(人間社会も含めて)を支配する法則(真実)とは何か、それは如何にして認識されるか、を学びとり、正しい考え方をもった社会人となる基礎が作られれば幸いである。この観点から地学入門書を選んだ。(発行書店名は略す)：小林英夫・岡邦雄(1954)、地学史；井尻正二(1954)、科学論；高井冬二編(1953)、地球；井尻正二・湊正雄(1957)、地球の歴史(岩波新書)；J.ギルリィ・A.C.ウォーターズ・A.O.ウッドフォード、金関義則・村井勇・久米羊一訳(1958)、地学、I・II；畑中武夫(1956)、宇宙と星；徳田御稔(1957)、進化論(岩波新書)；A.E.フェルスマン、地団研訳(1957)、おもしろい地球化学。

(文学部 唐木田芳文助教授)

法 律 学

商学部・経済学部では学部の性質上、民商法が中心となって講ぜられるのは当然であるが、法律の分野には民商法を中心とする私法部門のほか憲法、刑法、行政法などで構成される公法部門がある。憲法は一国の基本法として教養の点からも十分マスターしてほしいものである。公法、私法の両部門にまたがる労働法を中心とする社会法も資本主義の発展が生み出した矛盾の産物として忘れられてはならない法の一つである。

法律学はシルレルのいわゆる「パンのための科学」の時代から大きな発展をとげている。法概念の分析や法規の文理的解釈からは法現象の真の把握はできない。法の哲学的考察、法の社会学的理解の必要は法哲学と法社会学とを生み出したが、法哲学、法社会学はその基礎に哲学、倫理学、政治学、経済学、社会学、歴史学などの広範な知識を必要とする。

法律学の勉強はその周辺の科学への深い理解なしには不可能であって、一般教育の知識と教養を十分に身につけられることを先ずのぞみたい。次に法律学へのインビテーションとして入門書だけをかかけておくと、必要に応じて法律学辞典を参照し、文献解題をひもといてほしい。

川島武宜著 科学としての法律学・法社会学、尾高朝雄著 法学入門・法哲学概論、宮沢俊義著 憲法入門、末広謙太郎著 民法雑記帳、我妻栄著 民法案内・判例漫策、磯田進著 労働法、我妻栄編 新法律学辞典、末川博編 民事法学辞典 上下、菊井・横田・我妻共著 法学研究の栞 上下 (商学部 船越栄一教授)

経 済 学

原料の生産から、加工、販売、消費に至るまでの過程を分析し、諸々の関係を観察してみると、そこに不均衡や不安定のあること、又他方自ら均衡し安定するものもあることを見出す。

そして更に考察を進めると、原始生産、加工生産、配給生産など、価値を附加する三段階の産業構造のあることを識る。

さらに、商品市場を中心にした一連の認識の周辺に、資金を中心にした、金融市場、証券市場の存在すること、生産を指導する広告、PRの役割の重要性について識る。

さらに、人間労働を中心に労働市場があって、そこには筋肉労働、事務労働、サービス労働、知能労働等の種類があり、人間労働には牛馬や機械のエネルギーと全く異なった、人間性が内在しているので、労働価値の如き特殊な概念が導き出される。(HR)

而して上記の諸市場における需要と供給の原則に基づいて、価格の理論が生まれる。それは物の需給のみならず、貨幣の需給によっても変化することが解る。

このような現象が歴史に乗って、各時代に特有の型を現出する。経済学が歴史的な(社会)科学と言われる所以である。

テキストとして私の『経済学論攻』を使用する(商学部)が、社会科学的に何々を学ぶべきかとしては本書は最も不適当であるかも知れない。併しながら、如何に考うべきかとして過去四十年に亘つての私の実験からみて、必ずしも適切でないと思う。参考書は多過ぎる程であるが、篠原・林編 近代経済学講座 全四巻 有斐閣
木村・古谷編 近代経済学教室 全四巻 勁草書房
宇佐美・島編 マルクス経済学講座 全四巻 有斐閣を推奨する。

しかし、先ず、教室に出席して、講義を聴き、考え、洞察することが肝要である。

(商学部 中沢慶之助教授)

Reading, or studying literature, is a pleasurable searching; and as the pleasure is for yourself, so also is the searching done for yourself by yourself.

Reading is not an end in itself but a means for an end. In searching books you are really researching yourself. So, I advise you to

1. Read what books interest you most.
2. Read the 'classics' as much as possible.
3. Read one author's books at a time so that you can obtain a unified image of 'a man' behind them.

The priority is, however, for those books which occupy your interest most.

More specifically in speaking of the study of English Literature apart from what I said above, I advise you to read

1. The Bible.
2. Shakespeare.
3. C. S. Lewis.

There is a saying, allegedly Victor Hugo's, that "Great Britain has two great books; one which created her, the other which she created,"

i. e. the Bible and Shakespeare. Certainly these two are the very essentials of English Literature. Both are hard reading for freshmen, but fortunately Seinan is rich in Bible classes and Shakespeare scholarship as well as performance, so that you can have a good orientation in both.

You can master English Literature in four years at Seinan through constantly referring to these two 'great books in Great Britain.'

Lastly, I recommend to you Dr. C. S. Lewis and his works. He is now Professor of medieval English Literature at Cambridge University. He has written much about English Literature, religion and faith from his own life experience, and also he has published a good few original poems and stories. But what I most admire in him is his great integrity as a man. In him we

see every phase of the study of English Literature successfully combined by his pure and sincere motivation of 'researching oneself.' His

writings are very convenient for us foreign students to know England, her education and religion, and how to study English Literature.

I particularly recommend to you freshmen his Surprised by Joy (1955), the autobiography of his early life from childhood up to the end of his education at Oxford, because in it you can learn what the university life can mean for a student of English Literature. The book is being sold at the Jordan bookstore in Seinan at the price of 150 yen.

(文学部 山中先代講師)

英 語

随 想

経 済 学 と 数 学

平 岡 規 正

……ベクトルの和、差、積、ベクトルの大小……

次の第1表はあるセールスマンによる軽自動車スバル、ミニカ、キャロルの販売量を第1日と第2日とにおいて、その差によって比較したり、あるいは販売量を第1日と第2日とにおいて合計したりするための表である。

第 1 表	車 種	第1日	第2日	差	和
	スバル	a ₁	a ₂	a ₂ -a ₁	a ₁ +a ₂
	ミニカ	b ₁	b ₂	b ₂ -b ₁	b ₁ +b ₂
	キャロル	c ₁	c ₂	c ₂ -c ₁	c ₁ +c ₂

$\begin{pmatrix} a_1 \\ b_1 \\ c_1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} a_2 \\ b_2 \\ c_2 \end{pmatrix}$ をそれぞれ第1日の販売量ベクトル、

第2日の販売量ベクトルといい

$Q_1 = \begin{pmatrix} a_1 \\ b_1 \\ c_1 \end{pmatrix}, Q_2 = \begin{pmatrix} a_2 \\ b_2 \\ c_2 \end{pmatrix}$ とあらわす。

$$Q_2 - Q_1 = \begin{pmatrix} a_2 - a_1 \\ b_2 - b_1 \\ c_2 - c_1 \end{pmatrix}, Q_1 + Q_2 = \begin{pmatrix} a_1 + a_2 \\ b_1 + b_2 \\ c_1 + c_2 \end{pmatrix} \text{とし}$$

$a_2 - a_1, b_2 - b_1, c_2 - c_1$ のうちいずれか1つ以上が正でその他は零のとき、ベクトル Q_2 はベクトル Q_1 よりも大きいと定義し、 $a_2 - a_1, b_2 - b_1, c_2 - c_1$ のうちいずれか1つ以上が負で、その他は零のときベクトル Q_2 はベクトル Q_1 よりも小さいと定義して、ベクトル Q_2 とベクトル Q_1 との間に大小の順序をつけると、 $a_2 < a_1, b_2 < b_1, c_2 < c_1$ のような場合 Q_2 と Q_1 との大小は比較できない。これが実数とベクトルとの大きな相違点の一つである。

次の第2表は、スバル、ミニカ、キャロルの価格、単位利潤を比較するための表である。

第 2 表		スバル	ミニカ	キャロル
	価 格	x	y	z
	単位利潤	l	m	n

(x, y, z) を価格ベクトルといい、 (l, m, n) を単位利潤ベクトルといい、 $P = (x, y, z), R = (l, m, n)$ とあらわす。

第1日の総売上額は $a_1x + b_1y + c_1z$ であるが、これを

$\begin{pmatrix} a_1 \\ b_1 \\ c_1 \end{pmatrix} (x, y, z) = Q_1 P$ とあらわせば、(4頁の下段に続く)

ある旧職員の記録

木村 秀明

筆者は昭和23年9月から26年5月まで本館の司書主任として在任。十進分類法による分類切替、カード目録の整備、増加目録や図書館ニュースの刊行など活発な図書館活動を展開された。
現在 福岡県立図書館資料課長。

この「図書館報」をわたしは毎号愛読しているが、とりわけ『学院図書館回顧録』にはひとしお感慨を禁じ得ないものがある。実はこの回顧録は、歴代の館長に限り執筆を依頼しているものだとばかり考えていたので山下主任司書から頼まれたとき、予想外のことでとまどうと同時に、はなはだ感激した。何しろ14・5年も前のことで、記憶もおぼろげだが、印象に残るいくつかのことがらを中心に思い出を綴ってみたいと思う。

わたしの思い出は、まず、恩人八田薫先生のことからはじまる。昭和23年、わたしは、当時筑紫郡水城村にあった緑ヶ丘女子高校に勤務していた。復員してきたときの軍服のまま、教壇に立っていたのである。この学校は、かつての松屋デパートの宮村堅一氏が経営していた女子商業の後身で、すでに経営は苦しく、全職員の必死の努力にもかかわらずやがて廃校になる運命がきまっていた。

9月はじめのある日、週に1日だけ講師として来校されていた八田先生が、突然、校内の一室を借りていたわたしの自室をたずねてこられ、西南学院にこないか、といわれる。わたしはそれまでに先生とは二、三度ぐらいいしか言葉交わしたことがなく、思いもかけないこのお誘いに驚いたが、二つ返事でお引き受けしたことはいうまでもない。

(後日、あのかき先生はどうしてわたしを選ばれたのだろうかと考えてみたが、学校の再建に必死になっていたわたしの努力を認めてくださったものとしか思えない。人間たるもの、いつどんな場合でもベストを尽くして働くべきものだ、というのがそのときの感懐であった。もっとも、その先生の大量に、わたしはなんら報いていないことを恥じる。)

さて、新しい職場を得て欣喜雀躍、図書館に赴任してみても驚いた。二万冊あまりの蔵書があるにはあるが、書庫の一階に整理されているのはごく僅かで、あとはおおむね地下の倉庫に雑然と積みあげられ、埃をかぶっているのだ。貴重な波多野培根先生の文庫なども、頑丈なガラス戸付きの書架に収められて地下室に眠っていた。職員といえば高辺文子さんが一人きりで、閲覧貸し出しの任事は、終業ベルと同時に駆け込んでくる学生アルバイトの鳥飼君という人が担当していた。(鳥飼君はなかなかのハンサムボーイ

(3頁下段の続き)

この場合、総売上額は販売量ベクトル Q_1 と価格ベクトル P との積としてあらわされる。

このようにベクトルの積という概念を導入すれば、総売上額は販売量と価格との積であるという1財についての定義を多数財についても拡張することが出来る。

また1財の場合、価格に変化がなければ販売量が増加すれば総売上額は増加するが、 Q_2 が Q_1 よりも大きく価格ベ

で、たしか養島通りの薬局の息子さんだった。)

こんな状態だから、いったい何から手をつけたものか、ただ茫然とするばかりだった。その上、わたし自身何の知識もない。これはまず、図書館の基本から勉強しなければダメだと気がついて、そのころ、戦災で館舎を焼失し、お隣の修猷館高校に間借りしていた県立図書館を訪ねた。そこで、近く奈良県の天理で文部省主催の講習会が催されることになっている、もし希望するならメンバーに加えてやってもよいという。よろしく願いますと頼み込んでおいて、すぐ八田先生のところに飛んでいった。それはいい、いつて来給えといわれ、さっそく会計の藤井政盛先生の室に連れて行かれた。藤井先生が仏頂面でいったいいくらいるんだ、とおっしゃる。大体八千円ぐらいでしょうとお答えすると、そんな大金はない、と叱られた。(そのころの八千円はいまの二万四千円ぐらいか?)押し問答のすえ、勉強の必要性を強調して、ようやく八千円を獲得した。(その後、このときの強引さがかえって先生に気に入られて、ずいぶんと可愛がられた、心から感謝している。)

今思えば、わずか一週間の講習だったが、これはすばらしく役に立ったものである。このときはじめて、日本十進分類法(NDC)や日本目録規則(NCR)の知識を与えられ、図書館という世界があることを知った。いちどに眼が開けた思いがし、勇気が湧いた。何しろ必要に迫られての勉強だけに、しっかりと頭に入ったものとみえる。

講習を終えて帰ってくると、さっそく今迄の整理を御破算にし、新しい技術を導入することに決めた。まもなく相次いではいってきた坂口静一君と川田礼子さん、それに高辺さん鳥飼君の四人を動員して、地下室の本をすっきり閲覧室に運び出し、大掃除をした。このときは一週間程を休館にして、ついでに西南学院全蔵書展示会と銘うち、学院全体に宣伝して見に来てもらった。まさきに、英文学科の学生を引率して坂本重武先生がきてくださり、貴重書についての解説などもすすんでしてくださった。このとき、わたしの知らない本の知識なども与えられて嬉しかったことを覚えている。掃除が終ると、五人がリレーで本を書庫の一・二階に運び、整理にとりかけられるよう書架に配列をし

クトル P が変化しなければ、第2日の総売上額は第1日の総売上額よりも大きい。

総利潤は、単位利潤と販売量との積であるということを利用して、多数財についても拡張することが出来る。

多数財を取りあつかう場合、ベクトルは非常に便利な道具であることがこれによってわかったと思う。

(商学部教授)

た。朝、きれいに化粧して出勤してきた高辺さんや川田さんの顔が、みるみるうちに製粉工場の女工さんのようになり、眉の濃い坂口君は、その眉毛に埃のたまる率が多くて高砂の翁の面のようになり、お互いに顔を見合せて笑ったものだ。一か月以上もかかった苦しい労働だったが、四月からの新制大学発足という目標をめざして、何としてでもこの二万冊の整理を完了し、さらに三万冊を加えなければならなかったから、張り合いがあって実に楽しかった。

(ほかの諸君も、決してわたしをうらんではいないだろうと確信している。)

こうして一通りの配列が済むと、こんどは分類と目録にとりかかった。わたしと坂口君が分類を担当し、女の二人には目録を書いてもらった。できあがった目録カードは、閲覧のしごとの片手間に鳥飼君に並べてもらった。どうしても判らないことがあると、すぐ県立図書館に走った。そこで習ってきては、みんなに教えるというふうだった。このころになると、どうやらオシヤベリをしながら仕事をする余裕もできたが、それも永くは続かなかった。年末の大学設置審議会委員の視察をひかえて、ぞくぞくと本が到着しだしたからである。

どうか審査をパスし、西南学院大学は誕生した。学院の人口はふくれあがり、図書館も杉本善夫君、清水千代松君、沢田フイェ夫入らを迎え、ますます賑やかになっていった。短期間のあいだにこれだけの仕事を仕上げるかわら、わたしは週に一日だけ緑ヶ丘女子高校に講義に行き、西南高校で週五時間の講義を持ち、結婚の相手までも見付けたのだから、われながら超人的活躍ぶりであったといわねばなるまい。

その結婚の式を、昭和24年の5月に、西南教会で挙行了た。尾崎牧師の司式であった。(教会の位置は現在のところではなく、西南会館の隣にあった。しかしわたしの夫人は、いまでもそのときと同一人物である。)

さて、八月に八田館長は辞任し、中沢慶之助先生が館長に就任された。十月には、これも県立図書館から習ってきた曝書(ばくしょ・本を外気に触れさせ、殺菌浄化をはかる)を計画し、書庫全体を新聞紙で目張りして、ホルマリン消毒を行なった。同時に、読書週間のあることを教えられ、全学院の学生生徒から標語を募集してオフセット印刷に付し、学院内くまなく張りめぐらしたことは、中沢先生が前号に書かれたとおりである。

また翌年にかけて、山本慶子夫人、岩本拓さん、古賀淑子さん、田口欽二君、それに荒川文雄さんが加わり、かわりに鳥飼君、沢田夫人が引退した。

昭和25年には、西南高校図書館の活躍もはじまった。井上忠先生、金山靖夫先生、湯川達典先生などの指導で図書室ができ、わたしも技術面で応援をした。生徒の関心をたかめるためにヒッチコックの「断崖」などのフィルムを借りてきて映写会を催し、当時福永陽一郎君(福永津義先生の御長男・現在藤原歌劇団合唱部・東京コリアーズなどの指揮者)を中心に活潑に活動していた「西南コーラル・ソサイエティ」の人たちに、講堂でモーツァルトの歌劇

「フィガロの結婚」を上演してもらったこともある。これらの交渉をわたしがやって、図書部報に招待券を刷り込み、一部十円で生徒に売ったのである。このときのメンバーに、いま「フォー・コインズ」の名で売り出しているヴォーカル・グループの、毛屋禎吉君や手島洋一君、進藤君などがいた。わたしの余技としてのポスターが学院内にはびこったのもこのころで、オペラのプログラムをはじめ、有楽劇場でおこなわれた記念祭のポスターやプログラム、さらには大学の学生募集のポスターまで、一手に引き受けて描いた。短大(夜間部)のポスターを仕上げ、教室に張って眺めていたら、オヤ?もう印刷ができあがったの?といわれたことを思い出す。それほど精根をこめて描いたものだ。この「図書館報」の題字も、実はわたしがデザインしたものだ。当時タテ書きであったのを誰かがヨコ書きに直したものと思うが、そのころの流行だったこの字体も、今みるとまことに野暮ったい。ねがわくばこれを機会にもっと近代的な字体に変えてほしいものである。

横道にそれて雑然となってしまったが、昭和26年5月までのわずか二年半あまりの在任が、なんと十年も勤めたような錯覚を起させるほど充実していた。人についての思い出も数限りなくあるし、仕事のこと、建物のこと、できごとなど、思い出せばきりがない。わたしは25年の1月、厳寒の日に、夫婦そろって尾崎牧師の洗礼を受けたが、今では、酒をのみ、タバコも喫うという俗悪な役人になりさがって、学院のみなさんに合わせる顔は全くないといってよい。けれどもかって、なくなられた近藤定次先生からさどされた「人を見るな、その向うにある神さまだけを見よ。」という言葉だけは、決して忘れない。

現在のわたしは県立図書館に奉職し、すでに十三年目である。何ごともなく教員として一生を終るはずだったわたしが、八田先生に導かれて西南学院図書館の一員となり、みずから進んで図書館界に身を投じるようになったのも、すべて神の摂理であるとしかわたしには思えないのである。

西南学院に栄光あれ!

—学院図書館回顧録 その5—

告知板

- 新入学生の利用 新入学生に対する図書館のオリエンテーションが4月13日(土)に行なわれますので、その終了後から、新入学生は図書館を利用することができます。
- 春休長期貸出の返却期限 4月17日(水)まで。
- 学生利用規則の一部改正 学生利用規則第13条(借出手続)第3号の次に第4号が新設されました。
「4. 卒業年次の学生は、3月1日以降図書を借出すことはできない。また、現に借出中の図書はおそくとも2月末日までに返却しなければならない。」この改正規定は昭和38年4月1日から実施されています。